

東大使からのメッセージ「安倍総理大臣のポルトガル訪問」

平成 26 年 6 月 2 日

皆様、御健勝にて御活躍のこととお喜び申し上げます。

本日は、皆様に嬉しいお知らせがあり、筆をとりました。

5 月 2－4 日、安倍総理がポルトガルを訪問されたのです。

今回は、この訪問の「意義・目的」、「背景」、「成果」、「注目点」等の概要についてお知らせし、各個別事項については、今後順次詳しくお知らせすることに致したく存じます。

さて、ポルトガルと日本の間には、皆様も御存知のとおり、470年にわたる交流の歴史がありますが、現職の日本の総理大臣の訪問は、史上初で、今次安倍総理の訪問は、歴史に残る画期的な訪問となりました。

安倍総理は、2日、カヴァコ・シルバ大統領を表敬されたのち、パソス・コエリョ首相との首脳会談、共同記者発表、首相とのワーキングディナーに臨まれました。

また、総理は、2日、空港到着直後に「シャンパリモー財団」を訪問して、「現在のポルトガルの科学技術・研究や医療水準の高さ」を実感するとともに、3日には、430年前に「天正遣欧使節」が足跡を遺した「シントラ」と「エヴォラ」を訪問され、ポルトガル・日本間の「歴史的に特別な関係」に思いを馳せられました。

今回の訪問は、470年にも及ぶ日ポルトガル間の「歴史的な特別な関係」を確認した上で、今後の二国間関係を飛躍的に発展させる契機となったと言えます。

また、今後の両国間の関係を発展させて行く「基盤」として、両国が、グローバルに開かれた「海洋国家」であり、「民主主義」、「人権の尊重」、「法の支配」などの価値と原則を共有していることを改めて再確認しました。

時期的にも、今次訪問は、ポルトガルが、この3年間「トロイカ合意」のもとで「財政再建」に取り組み、その総仕上げとして「予防的プログラム」なしで無事に「支援終了」できるかどうかの「正念場」の時期に当たり、「アベノミクス」で日本の「デフレからの脱却」に取り組み成果を挙げておられる安倍総理の訪問は、ポルトガル政府に対する強力な支援と受け止められました。また、今回、トロイカ支援から「条件なし」で「卒業」して新しい段階に移行するポルトガルとの「貿易・投資の促進」に本格的に取り組むための環境が整い、今後の二国間経済関係の飛躍的な発展に資する時宜を得た訪問となりました。

今回の訪問の「成果」としては、両国首脳により発表された「共同コミュニケ」(骨子)
[【http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000038472.pdf】](http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000038472.pdf)にもあるとおり、今後、両国共通の

「共同行動」をとることで一致したことが挙げられます。具体的には、(1)政治及び安全保障、(2)経済、(3)文化・学術協力及び人的交流、(4)地域的・国際的協力のそれぞれについて具体的な「共同行動」が明確になりました。

これは、両国首相の「行動志向」(アクション・オリエンテイド)の姿勢の表れでもありません。

また、今次訪問での「新機軸」の注目点としては、安倍総理が掲げる「地球儀を俯瞰する外交」の視点にたち、両国間の二国間関係を更に重層的なものとするため、我が国が「ポルトガル語圏諸国共同体(CPLP)」へのオブザーバー参加の意図表明を行い、ポルトガル側もこの意図を歓迎するとともに、その実現のために協力を約束したことがあります。

我が国はアジア太平洋地域で知見・経験が豊富なのに対し、ポルトガルは、CPLPのリーダーであり、ポルトガル語圏のアフリカ、南米地域に支援を行っています。双方の知見を活用し、第三国における両国間の関係を強化するため、最近日本企業の投資が活発化しているモザンビーク、アンゴラ、ブラジル等で、現地での情報交換や具体的な協力の進展を目指すことになりました。

特に、本年7月にCPLP首脳会合が、初めてアジアの東ティモールで開催されることから、同会合で我が国のオブザーバー参加を求めていくこととなります。

更に、安倍総理は、パソス・コエリョ首相に対し、公式に訪日招待され、パソス・コエリョ首相はこれを快諾されました。これにより、今次安倍総理訪問のフォローアップとして、今次訪問の際に発出された「共同コミュニケ」の各項目について、その実現をめざす「目標」が明確になったと言えます。同首相の訪日時期については、明年の第一四半期を目処として準備を進めることとなります。

つきましては、パソス・コエリョ首相の訪日に向けて上記「共同行動」の具体化について皆様方の御支援・御協力をお願い申し上げます。